

研究所だより

第399号
2019年 3月22日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“白い光の中に 山並みは萌えて 遙かな空の果てまでも 君は飛び立つ
限りなく青い空に 心ふるわせ 自由を駆ける鳥よ 振り返ることもせず
勇気を翼にこめて希望の風に乗れ この広い大空に夢をたくして”
『旅立ちの日に』1991年 合唱曲
1991年埼玉県秩父市立影森中学校の教員によって作られた合唱曲
〔作詞：小嶋 登（校長） 作曲：坂本浩美（音楽教諭）〕



～希望に満ちた春がやって来ました！～

“光陰矢のごとし”とはよく言ったもので、過ぎ去ってみれば1年というのは本当に早いですね。この1年間の学校経営、学級経営、教科経営等ご苦労様でした。

この春をもって退職される先生方、長い教員生活の中で多くの子どもたちを育てられてきたことでしょう。今春からは自由人となります。健康に留意しながら、趣味などを生かした第二の人生を謳歌してください。益々のご活躍とご健勝を心からお祈りいたします。

現任校を離れ新しい職場へ赴かれる先生方、在任中は子どもたちのために、また清水の教育の発展・向上のためにご尽力を賜りまして、本当にありがとうございました。先生方が残された教育実践を財産とし継承していきたいと思っております。新任地での活躍をご期待しています。

引き続き清水市内小中学校に在職される先生方、この1年間、様々な事柄があったことでしょうか。次年度につながる成果や課題も明らかになったことと思います。実践を積み重ねた中での成果と課題です。それらを生かしながら清水の子ども達のためにご尽力していただけることを期待しています。

＝いじめのない学級をつくる！ ー4月にすべきことー＝

「いじめを乗り越える学級を築こう、4月から」

著作：米田 薫 氏（大阪成蹊大学教授）

（指導と評価 4月号から）

1 なくならないが減らすことはできる

新年度がスタートする。学級づくりを進め、子どもにも教員にも良い思い出がいっぱいの充実した一年にしたいものである。いじめについてはそれが起こらない、たとえ起こっても、その解決へのプロセスが成長につながる学級でありたい。

さて、いじめ防止対策推進法では、いじめを「該当児童等と一定の人間関係にある他の児童等が行う心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」と定義づけている。

わが国では、いじめは1980年代から概ね十年ごとに社会問題化している。国立教育政策研究所の子どもを対象とする追跡調査によれば、2004年から2015年までの中学生のいじめ被害経験は、男子平均32±8%、女子は40±10%であり、極端なピークはないことが明らかにされている。大人が認知する件数に増減はあっても、子どもが体験するいじめは毎年一定規模で起こっていると推察される。これは、社会の関心があるかどうかによらず、毎年、継続して取り組む必要があるということを示している。

2 集団の問題としてとらえよう

森田（2010注1）の4層構造理論では、いじめを「被害者」と「加害者」、その周囲に加害の子どもに同調し助長する「観衆」、そのほかに見て見ぬふりをする「傍観者」がいるととらえる。「仲裁者」層の子どももいるが、その出現率は、日本では小3で5割いたのが徐々に減って、中3では2割になり、逆に傍観者層が増える。ただ、いじめを見たときの対応として、先生に知らせる割合は減少するが、友達に相談するという割合は増加していることもあり、傍観する子どもが増加すると単純には断言できない。

日本のいじめの多くは学級で生じている。ネットいじめも、教室でのリアルないじめの延長であるケースが多いと言われている。加害者－被害者の2者関係ではなく、手段として起こっている問題としてとらえる必要がある。

荻上（2018注2）は、傍観者層の子どもの「友達に相談する」スタイルを「先生に知らせる」にシフトして「通報者」の役割を果たすことの大切さを伝えることや、「私はいじめに荷担しない、あなたの友達」と伝えられる「シェルター」層、「まあまあ」学級のコミュニケーションの流れを転換できる「スイッチャー」層の役割を取れる子どもの重要性を指摘している。そして、そのためには正しい知識や、他者への共感性を育む教育が重要であると述べている。

3 ぶれない向き合い方を定める

いじめへの取組は、80年代の被害者の救済を軸とするものからはじまり、90年代の加害者への介入、今世紀に入っての集団へのアプローチという流れがある。われわれが國分康孝先生から学んだことの一つに、個と集団への両面のアプローチの重要性がある。発生したいじめにきちんと対応することはもちろんだが、それは被害者－加害者へのかかわりだけでは済まない。いじめは、森田が言うように「集団の病」である。予防的に加害者の攻撃的性向の抑制や被害者の援助希求能力の向上をめざす個へのアプローチもあるが、「集団で起こったことは、集団で解決する」のが、教育カウンセリングの基本であることを強調したい。

（1）いじめを起こしにくい学級・学校づくり

「魅力ある学校づくり」は、最大の未然防止策となる。この「魅力」を感じる主体は、子どもである。派手なパフォーマンスを見せる大人から見た見栄えのよい学校ではないことを肝に銘じたい。指示・命令型の指導で子どもが「やらされ感」を感じる学校づくりでは、いじめの温床になっても、その解消にはつながらない。

① 計画的・継続的な人間関係づくり

人間関係づくりは、魅力ある学級を築くポイントである。だが、学級開きのときだけ、イベント的なことをやっても効果は知れている。年間計画を立て、自他理解のエクササイズから段階を経てコツコツ積み上げて構成的グループエンカウンター（SGE）を実践したい。週一回十分でよい。気持ちが交流できる場を意識的にもとう。人間関係の絆があれば、傍観者の目が「見て見ぬふり」から「うちの組で、いじめはやめてよ」というまなざしに変わり、その共感性が抑止力になる。

② 人との関わり方を教える

いじめが起きる学級は、自分の義務を果たしていなくとも権利を主張して他者を攻撃する一方他者の意見をきちんと聞けない風土を感じるものが少なくない。共感性を発揮する以前の課題として、個々の聞く力や集団として他者の意見に耳を傾ける風土を育てるために、ソーシャルスキル教育を実践し、学級で学びを共有したい。SGEとソーシャルスキル教育を用いた心理教育として「キラキラプログラムⅠ（注3）」がある。

③ 培った絆と学んだスキルを生かす場の保障

SGEで絆を築き、ソーシャルスキル教育で人間関係のコツを身につけても、それを正しく行使して個と集団を成長させる場がなければ、いじめ問題の解決につながらない可能性が



ある。われわれは、絆やスキルは悪いことにだって使えることを忘れてはいけない。

(2) 早い段階で察知して対応する

① いじめアンケートを春と秋に実施

いじめが増加する春と秋に、持ち帰って記入し、厳封して提出する形式のいじめアンケートを年間計画に設定して実施する。高橋ら(2018 注4)は、無記名で「この学級には、いじめがある」と尋ねる方法や、「私は最近友達と()」といった直接いじめの有無を問わない文章完成法を使ったアンケートを提案している。子どもが正直に答えやすい工夫は、常に必要である。

② 「子ども面談週間」で直に子どもと話す

アンケートを実施したら、面談する。意を決してアンケートに答えたのに、学校から何の反応もなければ、大人への信頼がくずれてしまう。もちろん、面談は該当者だけでなく、全員に行う。

③ 発見したら、きちんとチームで対応

いじめ事象を見つけたら、チームで対応する。山本ら(2018 注5)が示す対応の流れ等を基にして、漏れ落ちのないように留意し、「傷」が浅いうちに万全の取組を行う。沈静化しても、予後の見守りが大切であることは言うまでもない。

(3) いじめ防止教育

すでに、未然防止に役立つ良質なプログラムや実践例は蓄積されている。にもかかわらず、いじめが看過できない状況が続くのは、学校での取組が形骸化していたり、有効なプログラムを研修不足のまま安易に実施したり、勝手に変更して期待された効果が得られないといったことが生じるからだと推察できる。これまでの優れた実践に学ぶ姿勢を忘れないようにしたい。

4 新年度に向けて

(1) 今年度の振り返りを十分に

有効だった取組と、逆に不足していた指導の要因を十分に検証しないと、実効性のある取組は継承されない。取り組むべきことに十分な時間を充てよう。

(2) 登校するのが楽しみな学級づくり

「みんなが明るく楽しく過ごせる学級」であれば、加害者の出現を抑えられる。加害者がいなければ、いじめは発生しない。

(3) 教員の思いを届け、一緒に考えよう

学級開きで「いじめは許さない」と教員が宣言し、いじめや差別に対して、どうありたいかを問いかけよう。そして、いじめと無縁な教室にするための取組計画を伝えよう。被害体験のある子どもには一定の安心感に、加害経験のある子どもには一定の抑止力になろう。また、何かあったら大人に相談するようにすすめよう。森田らによれば、教員に相談すれば7割弱は何らかの改善があり、いじめが悪化した事例は7%弱となっていることも言い添えよう。

以上、教育カウンセリングの視点から、いじめに関する取組について述べた。「ちょこちょこっとなんて、パパッとできる」取組はない。来年度末を晴れやかな気持ちで迎えられるよう、今年度末から周到な準備をして新年度に臨もう。

(注) 参考文献

注1: 森田洋司『いじめとは何か』中公新書 2010年

注2: 荻上チキ『いじめを生む教室』PHP新書 2018年

注3: キラキラプログラムI

キラキラプログラムI(以下、キラプロI)は、週に一回、朝の学活等で十分間実施するエンカウンター(通称、朝キラ)と、年間十回、学活等で実施するソーシャルスキル教育とで構成する心理教育である。

朝キラの目的は、シェアリングでの感情交流を通じた豊かな人間関係の育成である。朝キラは、人間関係を築く練習の課題となるエクササイズと、気持ちを語り合うシェアリングが柱となる。初期には自他理解を深め、中期は自他受容・自己主張に取り組み、後期は役遂行や感受性の促進を通じて信頼し合える集団をめざす構成になっている。集団の成長に応じたリーダーシップを発揮することが大切であると研修等を通じて強調している。

ソーシャルスキル教育の目的は、認知面と行動面の社会性を育てることである。内容は、人間関係形成スキル、感情コントロールスキルを順に積み上げていく階層性をもった構成になっている。ソーシャルスキル教育は、「インストラクション」、「モデリング」、「リハーサル」、「フィードバック」、「般化」が基本の流れである。キラプロIでは、豊かな感情を育てるため、最後には気持ちを分かち合うシェアリングの時間を設けている。実施する際の注意点は、モデルとなるスキルについて、子どもたちに幅広く尋ね、現実生活に即したスキルを引き出すことである。みんなで話し合いながら、子どもたちにとって望ましいスキルをまとめるプロセス自体を大切にしている。

注4: 高橋知己・小沼 豊『いじめから子どもを守る学校づくり』図書文化 2018年

注5: 山本 奨・大谷哲弘・小関俊祐『いじめ問題解決ハンドブック』 2018年

＝離任＝

兼松 和典 先生 (SSW)

7年間スクールソーシャルワーカーとして、児童・生徒、保護者、学校を中心に相談業務に携わって頂きましたが、今年度末をもって退職されることになりました。
長い間本当にありがとうございました。

☆書籍・DVDの紹介☆

☆書籍・教材

- 「ルビィのぼうけん ワークショップスターターキット」(翔泳社)
コンピューターを使わない「アンプラグド」教材

☆DVD

- 「盲導犬クィールの一生」(文科省選定)

